「実践報告から学ぶこと、全国に普及・発展させたいこと」

三浦　文夫（みうら　ふみお）　日本社会事業大学名誉教授　武蔵野大学名誉教授

［略歴］1928年生まれ。東京大学文学部社会学科卒業、東京大学文学部大学院（旧制）2年修了。社会保障研究所研究部長、日本社会事業大学教授、同学長、武蔵野大学教授等を歴任。東京都社会福祉審議会委員長、日本地域福祉学会顧問、東北福祉大学大学院客員教授等を兼任。

［著書］『社会福祉経営論序説』（碩文社）『社会福祉政策研究』（全国社会福祉協議会）『高齢化社会と社会福祉』（有斐閣）『高齢化社会ときみたち』（岩波書店）『社会保障』（ぎょうせい）『公的介護保険への経営戦略』『介護保険施設の経営戦略－その理論と実践－』（以上 中央法規出版）『福祉サービスの基礎知識』『介護サービスの基礎知識』（以上 自由国民社）ほか。

20周年という大きな曲がり角の節目のとき

本日は、第20回目の高齢社会シンポジウムということで、ある意味では節目のシンポジウムになっていると思います。それはただ単に20周年という節目の問題だけではなく、日本生命財団が行ってきました助成事業の面からも、この20周年という意味は特別な意味合いを持っていると私は思っています。

今日の3つのご報告は、2003年から3年間にわたり、実践されてきました高齢社会先駆的助成事業の報告です。この後の2004年からは、先駆的事業助成の内容が少し変わります。2003年までは「高齢社会福祉助成」という名称で行ってきたのですが、2004年からはその名称の福祉を削除しまして、「高齢社会助成」に変わっています。大きな曲がり角の20周年という節目のときに、このような3つのご報告いただけましたことは、大変意義深いことだと思っております。

詳しい事業の内容については午前中の実践報告でご報告されていますので繰り返しませんけれども、この日本生命財団の高齢社会先駆的事業助成には、私は最初から関わってまいりました。「高齢社会助成」の最初の名称である「老人福祉助成」が始まりましたのが、今から24年前の1983年です。そして1987年から、「高齢社会を共に生きる」というシリーズ・シンポジウムが始まりました。それから数えて、今年は20周年なのです。「老人福祉助成」として先駆的・実験的に助成を行いまして、その成果の発表という形で、本日のようなシンポジウムが開催されるようになったのです。

当プログラムの当初の約10年間は、故岡村重夫先生（大阪市立大学名誉教授）が選考委員会の委員長を務められまして、全体の道筋を付けてくださいました。私は1993年から岡村先生の跡を引き継ぎまして、選考委員会の委員長を務めてきまして、今年で14年になります。

一貫して地域社会づくり、地域福祉を追求

岡村先生のときからの一貫した「高齢社会助成」のねらいは、先駆的・開発的な事業への助成ということで、先駆性・開発性をこの助成事業の趣旨・目的にしてきました。今までにあった事業を普及させるだけではなくして、先駆的な、開発的な事業に重点を置いているということです。特別養護老人ホーム等を中心としまして、あるいは社会福祉協議会へも助成したこともありますけれども、施設等を中心にします地域社会づくり、地域福祉を一貫して追求してまいりました。

もう一つ、1983年の当時におきましては、認知症高齢者（当時は痴呆性老人）のケアに関する問題に、まだ国は取り組んでおりませんでした。日本生命財団は、この認知症高齢者問題にも先駆的な形で取り組んできたのです。認知症高齢者のケアの問題を一貫して追求してきております。この先駆性ということ、先駆的・開拓的な事業とい

うことは、日本生命財団の助成の重要なキーワードの一つであったと思います。今回のお三方のご報告を聞きながら、この先駆性といいましょうか、今回は何を学んだのかということからお話をしていきたいと思います。

まず、先駆的事業という場合の先駆性です。これには、2つの意味があると思っております。一つは、これまで実際に行われていない新しい事業を地域の住民のニーズに従って起こし、そして展開していくということであろうかと思います。今回の3つのご報告とも、そういう意味では非常に優れた先駆性を持っていたと思いますが、これについては後ほどお話をしたいと思っています。

門真市、仙台市は大都市問題を先取り

もう一つは、この先駆性という意味の中には、将来を先取りするという意味合いもあると思うのです。今回の3つのご報告は、一つは門真市、それから仙台市、水俣市ということになっております。特に門真市と仙台市のご報告ですけれども、これはいずれも大都市地域や大都市の周辺地域です。記念講演の浅野史郎さんのお話にありましたように、2007年から団塊の世代が60歳に入るということです。2007年から約5年経ちます2012年から、団塊の世代が続々と65歳という高齢者人口の仲間入りをします。2015年になりますと、この団塊の世代の方々は、すでに65歳以上になってしまいます。この時期から日本の社会は、急峻な坂を上るような形で高齢化を辿っていきます。さらに10年経ちます2025年前後になりますと、団塊の世代の方々が75歳となりまして、75歳以上の方々が中心の高齢社会に移っていくと思います。

今日は、門真市と仙台市のお話がありましたけれども、この2つのご報告はある意味では団塊の世代が高齢化してくることを先取りした事業ではなかったかと思います。つまりこの団塊の世代を考えていきますと、団塊の世代は大体大都市地域に住んでおります。門真市でもお話しておりましたけれども、高度経済成長期に大都市に流れてきまして、そこで働いてきたのです。団塊の世代は大都市地域に定住しながら年を取ってきました。門真市のご報告でも、40年ぐらいの歴史の話をされましたが、高度経済成長期に大都市へ働きに来た人たちが65歳を迎え、急速な形で高齢化していくのです。

そういった課題を先取りする意味で、大都市地域あるいは大都市の周辺地域における高齢社会ということを念頭に置いて助成事業に取り組まれています。団塊の世代の人たちは大体サラリーマンだったので、地域とのつながりを持たない、会社人間です。しかも、子供たちとの関係で言いますと、ほとんどの人たちが子供たちと別に暮らしております。そのために、将来的に一人暮らし、高齢者夫婦が増えてくるということなのです。

今の門真市や仙台市の状況を聞きますと、そういう兆しが既に現れてきています。将来を先取りする形で、現在出てきている住民のニーズを酌み取って事業に取り組んでいるという意味での先駆性には、注目していいと思います。

水俣市は地方都市問題を先取り

それから水俣市の場合は、これとは逆の意味で高齢化しています。5万人だった人口が、今や3万人に減ってしまっているという形で、過疎化が進んでいく高齢社会に

なってきています。これもまた高齢化の一つの側面なのです。大都市のほうが高齢化すると同時に、残された地方都市も、逆な意味で高齢化が進んできているということです。それに対する挑戦という意味で、未だにない事業を展開してきたということだけではなく、将来を見込んだ形の事業を展開しているという意味での先駆性があるのではないかと受け止めました。

また、取り組まれた事業そのものも先駆性、つまり今まであまりやられていなかった事業ということです。中身については、いちいちお話する必要はありませんけれども、いずれのご報告も、制度化されていない事業です。つまり行政が色々な形で決めた事業ではなくして、それらが決まる前に、住民のニーズに従いまして、その地域の実情に応じた形で事業を展開してこられました。そういう意味での先駆性があったと思います。

先駆的事業が政策、制度に反映

今でこそ、小規模多機能型居宅介護と簡単に言いますけれども、その中身は、門真市の濵田さんたちの実験であったり、仙台市の中里さんたちの経験であったり、あるいは水俣市の「地域リビング」の展開です。これらの事業は、地域に即する形で展開され、しかも制度化されていなかったのです。まさしく住民のニーズに即した形で、それに応える形で事業を展開しています。地域に合ったものを新たに事業展開するということの先駆性です。

国としましても、これらの経験を酌み取って、小規模多機能型居宅介護という形の体系として組み入れたり、地域密着型サービスという形で今回の介護保険改正で導入を図ったという意味で、先駆的な役割を果たしてきたのではないだろうかと思います。

しかし、それぞれの地域で展開してきたものが、すべて政策や制度に組み入れられているわけではないのです。地域の特性がありますから、それらを全部組み入れることはできませんが、地域にとってみますと、かけがえのない仕事、事業を展開しているということです。国の政策、制度に組み入れられていない事業も、先駆的な事業だろうと思っています。

私は、それぞれの地域に即した、地域住民のニーズに即した形で事業を展開するというオーソドックスなやり方ではありますが、そこから出てくる事業の先駆性を、大きく評価しておきたいと思います。

住民のニーズに沿った住民主体の事業

二つめの大変重要なことは、住民主体ということです。中里さんは「住民流」という面白い言葉を使っていましたが、本当に住民に即した、住民主体のということが盛んに言われています。それぞれの3つのご報告の中に、本当に住民が中心なのだという思いが盛り込まれていますが、住民主体の取り組み方をされてきたということです。

社会福祉の大きな流れは、住民・利用者主体ということです。利用者＝住民という流れにおける住民の問題を重視して、常にそこに目線を持ってくる形の事業を展開していることです。この事業展開が今言った先駆性を生み出してきたのです。つまり制度化された中における福祉だけではなくして、本当に住民の生活に即した、生活のニーズに即した事業が展開されてきたと思います。

率直に言いますと、日本の社会福祉の大

部分は、国の制度の中に組み込まれてしまっているのです。しかし、現実には制度に合わない、社会福祉の色々なニーズがあります。そういったものは、実は切り捨てられてしまうのです。ときには制度に当てはめられてしまうという可能性、危険性があるのです。残念ながら、我が国の社会福祉に関わる多くの方々は、制度化された社会福祉だけが社会福祉だと思っているのです。実は、その制度化された社会福祉だけでは、国民の多様な生活を支えきれないのです。

福祉は生活そのもの

その意味で、今日の3つの先駆的事業の実験は、制度化された社会福祉にとらわれるのではなくして、住民の生活に即した、住民のニーズに即するという姿勢を貫き通してきているということが、社会福祉の一つの原点でもありますけれども、先駆性を生み出してきた大変重大なものではないかと思います。しかも、そこに出てきている問題が、どこからどこまでが福祉で、どこからどこまでが生活かという区別がありません。私はある意味では、福祉は生活そのものだと思っております。そういったことを、実践の中で証明いただけたのではないかと思っています。

ですから、寝たきりのお年寄りに対しての訪問や、あるいは認知症のお年寄りに対してのケアだけではなくして、犬の散歩にあったように、様々な形で自分たち自身の思いや、地域をつくるための広い意味での福祉を取り上げています。あるいは住民の生活に全体的な形で目を向けられているということも、福祉を見ていく場合の目として大変重要な意味を持っていると思っております。

高齢者から子供までの多様なニーズに対応

三つめの注目する点としまして、3つのご報告とも、高齢社会助成事業の報告だったわけです。高齢者福祉が中心になっていたはずなのですが、実は、濵田さんのご報告によりますと、まず保育所から出発しまして、高齢者福祉に関わり、最近はまた子供や障害者問題に戻りという形に変遷してきています。中里さんのご報告でも、高齢者問題だけではなく、障害者も、それから子供たちの問題もというものが取り上げられてきています。永野さんのご報告でも、公民館を活用されておりますので、別に福祉だけではないのです。まさしく住民の多様なニーズを、全部組み込んできています。つまり制度化されますと縦割になりますが、そういったものではない、もっと全体的な形でニーズを酌み取ってきているという実験は大変重要と思います。

記念講演の浅野史郎さんのお話の中に、「このゆびとーまれ」という富山県のお話がありました。これは、富山型デイサービスという形で制度化されました。富山県では、これに対して特別に助成を出しております。富山型デイサービスでは、子供だとか高齢者だとかではなくして、利用する人はみんな一緒に利用するという形をとっています。地域に即して考えると、そういったことが必要になってくるのです。

ご承知のとおり、介護保険の改正が2005年に行われましたが、残された大きな課題の一つに被保険者の拡大問題があるのです。つまり障害者の介護問題を介護保険の対象に入れるかどうかが検討課題になっています。今後の方向としては、障害者の介護問題を含めるようになるでしょう。今までのように高齢者介護だけではなくして、介護については、障害者も高齢者も、一緒にな

ってくるという気運が出てきております。今回取り組まれた助成事業は、それらの問題を先取りしているという側面もあると思っております。

日常生活圏、徒歩圏での事業が大切

実はもっと準備をしていたのですが、時間が来てしまいました。もう一言、四つめを付け加えますと、地域の範囲、大きさ問題が大変重要です。先ほど濵田さんがお話されたように、日常生活圏が最終的には徒歩圏であるということです。ここまで問題が深められてきていて、徒歩圏であればこそ、住民の本当の参加が可能となりますが、市町村のレベルではやはり形式的になります。日常生活圏でも広いかもしれないのですが、徒歩圏まで狭めますと、住民自身が直接参加し、利用するという形で本当の住民参加になるのではないでしょうか。

社会福祉の大きな流れで言いますと、今までの国から地方へという流れの中で、地方の中でも都道府県中心から市町村へ、さらには市町村から日常生活圏へ、今日の話ですと、日常生活圏をもっと身近にする必要があるということです。そのようにだんだんと住民に身近な地域に向かってきていると思います。住民に身近な地域になればなるほど、住民の参加が可能になるでしょう。日常生活圏で住民参加が結びつくことが、それぞれの3つの地域の助成事業の課題ではなかったかと思ったりしております。

3つの社会福祉法人がこの課題に取り組まれたということも大変重要な議論です。社会福祉法人のあり方を示す、3つの重要な取り組みであったような気がします。もっとお話したいのですが、時間となりましたので、こういった問題については、これからの総合討論の中で議論を深めていただければありがたいと思います。（拍手）